

「アジア」を抱きしめて:アジア主義の転換としての大正時代¹

ハルベルク大学&フライブルク大学

トルステン・ヴェーバー

(Torsten Weber)

要旨

政治的構想としての「アジア」は、大正時代になって初めて、日本における公の論争の中で根付き発展した。日本人の多くは当初日本の「アジア性」という認識を拒絶していたが、第一次世界大戦において認識された欧米の没落や、排日移民法、そして西洋での黄禍論の影響で、アジアに対する肯定的な感情が広がったことにより、大正時代に民衆の中で「アジア」という概念が芽生えたのである。重要なことは、1910代及び20年代の日本のアジア主義論争は世界主義的、国家中心的、帝国主義的概念が共存するなど、非常に多様であったことである。また、アジア主義はアジアの他地域（特に中国）でも広く議論され、アジアでのアジア主義および西洋で論じられたアジア主義は相互に影響し合った。「アジア」という概念が日本軍や政治家によって頻繁に用いられた1930年代とは異なり、大正時代のアジア主義活動はアジアの様々な国々の非政府活動家によって推し進められたことから、下からのアジア主義としての特徴も持っていたといえる。

1 研究テーマ、目的、方法

本研究のテーマは近代日本のアジア認識である。研究対象は、1910年代から1920年代における日本のアジア主義に関する政治言説であり、満州事変、満州国の建国及び日本の国際連盟脱退以前に論じられたアジア主義という概念を中心とする論争を研究としている。この研究では日本のアジア主義論をトランスナショ

¹本記事はハイデルベルグ大学、日本学科のヴォルフガング・ザイフェルト教授の指導の下で書き、2011年11月同大学に提出した博士論文をまとめたものである。Torsten Weber, *Embracing Asia: Japanese Asianism Discourse in a Transnational Setting, 1912-1933*, Ph.D. dissertation, Heidelberg University 2011 (英文) 参照。

ナル・ヒストリー²として理解しているため、日本人によって書かれた、もしくは日本において日本語で出版されたアジア主義についての書物だけではなく、日本における論争に影響を与えたと考えられる海外のアジア論、及びアジア主義論も含め分析する。

研究目的は、主に二つに分けられる。第一に、同時代、つまり大正時代にアジア主義がどのように解釈され、用いられたか調査することである。そして第二に、大正時代に論じられたアジア主義がどのような歴史的な役割を果たしていたかということ进行分析することにより、明治時代から昭和初期におけるアジア認識との連鎖を考察することである。

研究方法は、言説の分析であるが、特に、ドイツの歴史家ラインハルト・コゼレック³やアメリカの歴史学者メルビン・リヒター⁴そしてテレンス・ボール⁵が示唆した概念史の視点から分析する。つまり、政治概念を、公の言説における政治概念の意義や役割、そしてそれらの変化を観察することにより、分析する。

研究対象としては学者によって提唱されたアジア論だけではなく、メインストリームの政治言説を分析するために、主に同時代に広く知られていた総合雑誌や新

² このアプローチについては Jürgen Mittag/Berthold Unfried, “Transnationale Netzwerke – Annäherungen an ein Medium des Transfers und der Machtausübung”, *Transnationale Netzwerke im 20. Jahrhundert*, Leipzig: Akademische Verlagsanstalt 2008, 9-25 を参照。

³ Koselleck の概念史については Reinhart Koselleck, “Begriffsgeschichte”, *Lexikon Geschichtswissenschaft. Hundert Grundbegriffe*, Ed. Stefan Jordan, Stuttgart: Reclam 2002, 40-44 を参照。

⁴ リヒターの概念史については Melvin Richter, “Pocock, Skinner, and the Geschichtliche Grundbegriffe”, *History and Theory*, 19 (1990), 38-70 および *The Meaning of Historical Terms and Concepts. New Studies on Begriffsgeschichte*. Ed. Hartmut Lehmann/Melvin Richter, Washington: German Historical Institute Washington 1996 を参照。

⁵ ボールの概念史については Terence Ball, “Conceptual History and the History of Political Thought”, *History of Concepts: Comparative Perspectives*. Ed. Iain Hampsher-Monk et al., Amsterdam: Amsterdam University Press 1998, 75-86 を参照

聞記事を用いている。本研究ではアジア主義を抽象的な思想としてではなく、具体的な内容を含む概念として理解されている。

2 タイトルについて

「アジア」を抱きしめてというタイトルは、アメリカの歴史家ジョン・ダワーの *Embracing defeat: Japan in the wake of World War II* (和訳のタイトル『敗北を抱きしめて』)⁶からインスピレーションを得てつけたものである。ダワーはタイトルについてあまり具体的な説明をしていないが、*embrace*という言葉は友情や親善の表現だと解釈できると同時に、意に反する行為でも必要性に応じて行うという打算的な表現としても使われると解釈できる。つまり結果的には、あることに対する肯定的な態度、行動を表す表現であるが、その行動に秘められた意志は肯定的でも、否定的でもあり得るといふかなりあいまいな表現だと考えられる。アジアやアジア主義も同じようにあいまいなのではないかと私は考える。

3 アジア主義の定義

アジア主義と何か。これまでの研究ではアジア主義を定義する際に、常にアジア主義の多様性そしてそれゆえに定義することの困難さが強調されてきた。最もよく知られている例として竹内好の定義を取り上げるが、彼の定義によるとアジア主義は「ある実質内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいふべきもの」であり、「それぞれ個性をもった「思想」に傾向性として付着するものであるから、独立して存在するものではないが、しかし、どんなに割引きしても、アジア諸国の連帯（侵略を手段とすると否とを問わず）の指向を内包している点だけには共通性を認めないわけにはいかない」というものである⁷。つまり、竹内はアジア主義の独立した概念としての機能は否定したが、

⁶ John W. Dower, *Embracing defeat: Japan in the wake of World War II*, New York: W.W. Norton & Co. 1999 および『敗北を抱きしめて: 第二次大戦後の日本人』・上/下、ジョン・ダワー著; 三浦陽一, 高杉忠明訳、東京: 岩波書店 (2001年) を参照。

⁷ 竹内好, 「アジア主義の展望」『アジア主義』, 竹内好編, 東京: 筑摩書房 (1963年) 7-63頁。

傾向としてのアジア主義はアジア諸国の連帯を主張しているという定義を生み出したのである。

「つまり、私の考えるアジア主義は、ある実質内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいべきものである。右翼なら右翼、左翼なら左翼の中に、アジア主義的なものと非アジア主義的なものを類別できるというだけである。（中略）アジア主義は、膨脹主義または侵略主義とは完全に重ならない、ということだ。またナショナリズム（民族主義、国家主義、国民主義および国粋主義）とも完全に重ならない。むしろ、左翼インターナショナリズムとも完全には重ならない。しかし、それらのどれとも重なり合う部分はあるし、とくに膨脹主義とは大きく重なる。もっと正確にいうと、発生的には、明治維新革命後の膨脹主義の中から、一つの結実としてアジア主義が生まれた、と考えられる。しかも、膨脹主義が直接にアジア主義を生んだのではなくて、膨脹主義が国権論と民権論、また少し降って欧化と国粋という対立する風潮を生みだし、この双生児ともいべき風潮の対立の中からアジア主義が生み出された、と考えたい。」

「アジア主義は、前に暫定的に規定したように、それぞれ個性をもった「思想」に傾向性として付着するものであるから、独立して存在するものではないが、しかし、どんなに割引きしても、アジア諸国の連帯（侵略を手段とすると否とを問わず）の指向を内包している点だけには共通性を認めないわけにはいかない。これが最小限に規定したアジア主義の属性である。」竹内好「アジア主義の展望」、竹内好編『アジア主義（現代日本思想大系9）』筑摩書房、一九六三年

大正時代にアジア主義がどのように把握されていたのかを分析するため、同時代の定義を参考にするのは価値があると思われる。例えば、1919年に出版された辞書ではアジア主義は新しい言葉として次のように定義されている：

「汎亜細亜主義 — 三千年の歴史を有する亜細亜民族は、共通の人種・宗教・歴史・文物の上にある。故に一度結束して起って欧米の白人の世界と相対抗し、更に進

んでは東洋の覇権の下に彼らを屈伏せしめねばならぬと主張する主義」⁸

『新しい言葉の字引』（1919）

この定義は二つのポイントを指摘している。ひとつは、連帯よりもアジア人の共通性、共通の利害を強調していることであり、もうひとつは、アジア主義に内在する欧米に対する反発的な面を明記し、白人の世界への抵抗や対抗を主張していることである。抵抗や対抗というのは、政治的・経済的植民地化に対する抵抗だけではなく、西洋での東洋に関する政治言説における抑圧への抵抗も含むと考えられる。この意味で、大正初期のアジア主義論は西洋の黄禍論に対する白禍論として知られている⁹。

4 大正時代のアジア主義

アジア主義という概念は大正時代以前にも、ごく稀に用いられていたものの、メインストリームの言説となったのは1910年代からである。その背景を作りだした要因として以下の3つが考えられる。

一つ目は中国の辛亥革命である。この革命により親日派である孫文が指導者になったことで、親中派の日本人にとって中国人とともに東アジアの秩序を改造できるというアイデアが現実的なものとなった。他方ではしかし、帝国主義的な日本人がアジア主義というスローガンを掲げ中国における日本帝国の膨張を図ったというケースもあった。

⁸ 「汎アジア主義」『新しい言葉の字引』,服部嘉香,植原路郎編,東京:実業之日本社(1919年)、引用文は「汎アジア主義」『日本国語大辞典』第11巻,東京:小学館(1972年)、5頁より。同様の定義が1925年出版された改訂版でも確認できる。「汎アジア主義」『新しい言葉の字引』,服部嘉香,植原路郎編,東京:実業之日本社(1925年) 591-592頁を参照。

⁹詳細は橋川文三、『黄禍物語』,東京:筑摩書房(1976年)を参照。

二つ目はアメリカの排移民政策、いわゆる排日移民法、日本人の同化の問題である¹⁰。1913年のマハン・チロル論争の際、アジア主義についての記事が初めて日本の新聞に掲載された。論争のきっかけとなったのはアメリカ、カリフォルニア州の排日土地法で、日本人は他のアジア人と異なるのかというテーマが論じられた。この論争を通し、西洋における日本のアジア性についての考え方や論争が初めて一般の日本人に広く知られることになった。

三つ目は欧州の没落として認識された第一次世界大戦である¹¹。この戦争により反西洋的思想をもつアジア人にとって、日本人が明治維新以降、理想とした欧州の文明の醜い本音が明らかになった。これにより欧州は従われるべきモデルとしての地位から脱落し、アジアこそが世界を改造する救済者になる、つまりこれからはアジアの時代になるという希望が広がったのである。

これらの背景から、アジア主義という概念が普及し、多様的に利用されたのである。ただし、必ずしも皆に肯定的に受け入れられたというわけではない。日本主義的な立場から法学者、蜷川新はアジア主義を日本の自殺と捉え¹²、また自由主義者として知られている大山郁夫はアジア主義を弱者の福音と中国の陰謀として強く批判する¹³など、アジア主義に対して反対の声も多くあった。

大正晩期に入ると、アジアという概念に対する評価はさらに高まった。日本人が突如心情的親アジア派になったというわけではなく、パリの平和会議で宣言さ

¹⁰ 詳細は Torsten Weber, “‘Unter dem Banner des Asianismus’: Transnationale Dimensionen des japanischen Asianismus-Diskurses der Taishō-Zeit (1912-26)“, *Comparativ*, 18-6 (2008), 34-52 を参照。

¹¹ 詳細は Torsten Weber, “From Versailles to Shanghai: Pan-Asianist legacies of the Paris Peace Conference and the failure of Asianism ‘from below’”, *Asia after Versailles. Asian Perspectives on the Paris Peace Conference and the Post-War World, 1919-1933*. Ed. Urs Matthias Zachmann, London: Routledge (forthcoming 2012) を参照。

¹² 蜷川新, 「モンロー主義の模倣」『外交時報』, 267 (1915年12月), 16-20頁および 蜷川新, 「世界人の世界主義」『外交時報』, 309 (1917年9月15日), 1-8頁を参照。

¹³ 大山郁夫, 「大亜細亜主義の運命」『新日本』, 6-3 (1916年3月1日), 18-30頁を参照。

れたウィルソンの理想主義（平等、民族自決）がアジアでは適用されず、アメリカでは排アジア移民法が強化されたため、アジアはアジア人のアジアにならないければならず、アジア人が一つになりアジアのために立ち上がらなければならないという主張が高まり、その結果アジアが肯定的に解釈されたのである。大正13年は日本のアジア主義論の中で特に重要な役割を果たしていると考えられるが、その理由として以下のものが挙げられる。

1. その年の5月に、アメリカの排日移民法が強化されたが、それが日本の世論に非常に大きな影響を与えたこと。これにより日本のアジア論は激化し、アジア主義が日本の対外政策の選択肢の一つとして議論されるようになった¹⁴。

2. 同年6月にインドのタゴールが来日し、アメリカの法律を全アジアの屈辱と発言し、アジアの共通性を主張したこと。

3. 同年11月に中国の孫文が来日し、神戸での大アジア主義演説でアジア主義を欧米への対抗の方法として提示したこと。反アジア的な日本人にとって孫文の論じたアジア主義は非現実的な理想主義に過ぎなかったが、他の日本人にとってはアジア主義を中心とする日中提携の可能性を高める提案として解釈された¹⁵。

結果として、1925年までアジア主義は日本の政治言説の中で、アジアはアジア人のためのアジアでなければならないというアジアの政治的そして言説的自決を提唱する概念として知られ、議論されたのである。

5 研究の結果：転換、転換期とは？なにが変化したのか？

研究の結果は大きく4つにまとめられる。

¹⁴ 古屋哲夫、「アジア主義とその周辺」『近代日本のアジア認識』、古屋哲夫編、東京：緑蔭書房（1996年）、47-102頁を参照。

¹⁵ 陳徳仁/安井三吉編、『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、京都：法律文化社（1989年）を参照。

1. 大正初期には、多くの日本人は他民族を指す概念としてアジアを捉えていたが、大正末期には、アジアには日本や日本人が含まれるという概念に目覚めた。つまり、大正初期には、アジアという概念は多くの日本人によって日本を見下す概念であるとして否定されていたのに対し、昭和初期にはアジアの新解釈、肯定的な解釈が主流となったのである。この意味で、多くの日本人がアジアを抱きしめたと言える。

2. 大正時代のアジア論は、明治時代のごく少数の人々によってのみ論じられた過激なアジア論と、昭和初期（特に満州事変後）からの日本軍及び政治家が生み出したアジアという、上からのイデオロギーとしてのアジアという概念とをつなぐうえで重要な役割を担っている。大正時代のアジア論が比較的自由に、多様に、そして政府ではなく民間で論じられたことから、大正時代のアジア論は大正デモクラシーの一部ととらえることが可能である。

3. 第一次世界大戦や人種差別的な法律に対する反発により、または日本帝国の膨張の野心を背景に、大正時代にはアジア主義に対する肯定的な評価が増加した。そのため、アジア主義が非常に多様に解釈され、後藤新平・徳富蘇峰の帝国主義的な解釈や浮田和民の世界史的な解釈、小寺謙吉の汎欧米（反白人）親中国的解釈などが生まれたが、その結果、アジア主義は異なった政治指針（アジェンダ）の一部となった。

4. 大正時代には、例えば、1926年に長崎で日本と中国のアジア主義者により開催された第一次全アジア民族会議や1927年に上海で開催された第二次全アジア民族会議など、下からのトランスナショナル・アジア主義的な活動が試みられたが、失敗に終わった。失敗の原因としては、日本と中国の出席者間の衝突も挙げられるが、日本政府の圧迫が占めた影響が大きいと考えられる。日本政府は満州事変の後、初めて正式にアジアという概念を肯定したが、その際大正時代のメインストリーム言説で構築された理論や概念の多くが政府によって（上から）盗用されたと考えられる。

この研究から、過去のアジア論研究の中で重要視されてこなかった大正時代が、アジア論の発展において非常に大きな役割を担っていること、そして概念史の研究対象として重んじられてこなかったアジア主義という概念もまた近代日本政治思想史においてだけではなく東アジアの政治思想史の中でも重要なキーコンセプトであると結論づけることができる。